

令和元年度 第10回 昭島市社会教育委員会・要点録

開催日時／会 場 令和2年1月23日（木）午後7時00分～9時00分 昭和会館
出席者 谷部議長、中村副議長、佐伯委員、齋藤委員、長瀬委員、稲垣委員、
濱田委員、松本委員、二ノ宮リム委員、吉村委員
欠席者 なし
事務局 川崎社会教育係長、来住野社会教育主事

1 開 会

＜配付資料＞

- 資料1 視察研修行程表ほか
- 資料2 第4回市民のニーズを活かす・つなげる あきしま会議
- 資料3 昭島市社会教育委員会～自ら『行動する』社会教育委員を目指して～
- 資料4 第5ブロック研修会実施報告
- 資料5 令和3年度関東甲信越静社会教育研究大会東京大会実行委員会第3回実行委員会について

- ・昭島市月間行事予定表 2月
- ・とうきょうの地域教育 No.138
- ・市民のニーズを活かす・つなげる あきしま会議
- ・青少年交流センターまつり

2 議 題

（1）視察研修について（資料1）

※事務局より資料説明

令和2年2月28日・9日におだわら市民交流センターUMECO、清水テルサを視察する。

（2）市民のニーズを活かす・つなげる あきしま会議について（資料2）

委 員 今回のあきしま会議は、もともと社会教育委員の話し合いの中から生まれてきたので、もう一度原点に立ち返り、最初に議長のあいさつという形で社会教育委員としての思い・企画の理由を伝える場をつくりたい。もともとの話の流れとしては社会教育行政をよくしていく、社会教育委員としてさまざまな提案していく中で、市民のニーズをなかなか委員としても理解しきれていない、市民がニーズを伝える場もなかなかない、そこで「あきしま会議」という場をつくらうというのが発端だったかと思う。そのあたりの経緯なども話せるとよいのではないか。ここ3回やってきて、かなり形ができてきたと思うが、ラウンドテーブルという形でいろいろな人が経験や想いを分かち合う、交流をするという流れになっており、ここで原点に返り、付け加えるとすれば、自分自身の活動を振り返ったり、気づきを持ち帰ったりすることからもう1ステップ進んで、自分た

ちが実現したいこと、昭島をよりよくするためにこういうことができるのではないかと
いうことなど、意見・提言の発信があきしま会議からできるようになっていくと、より
社会教育委員の本来の想いとも合致するし、市民にとってもより価値のある場になると
考える。今回は大きく流れを変える必要はないが、それを踏まえてそれぞれの市民活動
が地域をより良くしていくための一つであると確認できるとよい。その時に SDG s とつ
ながるそれぞれの活動という整理をして示せたらよいと考えている。それぞれの市民に
は変化を生み出す力があって、現状に対しておかしいと思ったり、変えた方がよいと思
ったりすることについて、声をあげて動いて変えていけるということ、行政と対等な立
場で市民も声をあげていける存在だということを示すまとめ方ができたらと考えてい
る。

委 員 SDG s について、参加者は知っているだろうか。資料を配付した方がよい。ご自身の
活動がこれに関係にあるとマッチングできていないと思う。

委 員 ほとんど知られていないと思う。ちょっとした発見になればよい。

議 長 報告者として新しい方が多いので、それは面白いと思う。

(3) 令和元年度社会教育関係委員研修会について(資料3)

議 長 今回の研修会では、各委員会の紹介をすることになっているので、資料を作成した。
それについて、ご意見を頂きたい。

委 員 資料は配付だけとし、ほかの委員会の参考になるよう、会議の冒頭に一言コーナーを
行って和やかな雰囲気では会を進めているなど、社会教育委員会議の特色などをご紹介い
ただければよい。

(4) 第30期テーマについて(資料4)

委 員 第5ブロック研修会の資料を拝見して、不登校についてなど演劇から考えることもで
きるというのは新しい発見だ。昭島市にも市民劇団がある。

委 員 それがそのまま子どもたちにとって居場所となっている。演劇の教育的価値は高いも
のだと思うので、社会教育的にやるとすれば裏方も含めてもっと市民を巻き込めたらよ
いと思う。

委 員 演劇は子どもの可能性を引き出す場でもある。

議 長 これまでいろいろなテーマで話し合ってきた中で、30期のテーマとしてあきしま会
議がどのように展開してきたかを踏まえながら、今後あきしま会議をさらにどう進めて
いけばよいのかというまとめができたらと思うがどうか。

委 員 あきしま会議をどう評価していくかということの中にどうテーマを組み込んでいく
かを考える必要がある。11月21日の資料4に出ているキーワードから見ても子どもた
ちを中心に様々な人が地域の在り方や社会の在り方について発言できる、参加できる仕
組みを社会教育が支えたいということなのではと思う。SDG s も「誰も取り残さない」
というのが大きなスローガンとなっており、そこには若者や外国の方、障害のある方も
含まれている。様々な人たちが声をあげることができる、対話に参加することができる

場としてあきしま会議を捉えていくことができたらいということではないか。もしかしたら、あきしま会議だけにしてしまうと狭くなってしまうのかもしれない。あきしま会議に参加する人は市民の中でもごく1部の人であるし、地域について様々な人が話し合ったりする場合は、あきしま会議以外にもあるだろう。いろいろな人の声を結びつける場づくり、いろいろな人が社会に参加していく場づくりを社会教育が担う、ということテーマにあきしま会議もその一つとして中心に位置づけつつ、そのほかにもこういう場があるとか、こういう場が必要だというのもよいかもしれない。

委員 あきしま会議をやったことの一つとして、さまざまな社会教育関係団体がまず活動を少しでも知ってもらいたいというのがある。そのあと、ほかの団体の話を聞いて、自分たちとの違いや別の魅力を感じることもできる。また、団体だけでは聞くことができない中学生など若い人たちの声を聞く機会にもなっている。世代を超えていろいろな人の考え方を知ることができる場となっている。あきしま会議のこれまでの経緯は、それを求めていたのではないかとも思う。

委員 私が感じていたのは、あきしま会議に参加される団体の方々は、少なからず、お子さんが小さい時にはPTA、そして自治会など地域のコミュニティに所属して何かを一生懸命やってきた方が問題に気が付いている人が多い、ということだ。それは無償のボランティアから始まっていることが多く、問題意識を全くなにも感じず、PTA等の活動もされず、地域にも属さない人たちが、突然こういった活動に参加することは非常に難しく、敷居が高い。それが、ボランティア活動などが広がっていかない、あるいはコアになる人がいないという原因になっているのではないか。やはり何かの活動をされている人は、地域の問題に気が付き、活動に使命感を持って取り組んでいるということが見えてきて、ボランティアのすそ野を広げることの難しさを、あきしま会議を重ねるごとに感じる。公民館の利用に関しても、高齢者や昔公民館で活動していた方々が現在の公民館活動に参加されているので、そこをなんとかしないと新しい人が入っていくなどの広がりはないのではないか。自分の中ではあきしま会議をこの先どうしていけばよいのかを考えている。そのような中で希望となっているのが、家庭環境の中でボランティアをすることが望めないから、教育の中に入れていく考えで、ボランティアカードをつくっていくという取り組みがよいのではと思う。しかし、ボランティアに参加する曜日が平日でない場合は、家庭の声掛けや前日でも学校からの声掛けがないとうまくいかないということになる。地域は子どもたちが来ると待っていても、その想いと子どもたちの行動が一致しないという経験もある。非常に難しさを感じている。

委員 あきしま会議にはいろいろな人が集まっているが、参加している人はある意味特殊な方々だ。ただ、これからどうしなければならぬかを考えるときに、今出ていない人たち、様々な理由があるだろうが、それらの人たちにどう目を向けていくか。全員があきしま会議に来ることがゴールではなく、あきしま会議に好きで出ている人たちが、その効果を外に波及していけるかという方向で話を進められればよいのではないだろうか。

委員 「対話の文化に慣れる」ということ、今求められる一番大事なことはないだろうか。対話というのは、面と向かって話をする、意見を言うということだが、今なかなか面と

向かって人と話をすることができない、おうちでも会話が少ないために学習支援ボランティアにずっと話しかけてくる場面も見られることから、話を聞いてもらいたい人が多いのだと思う。人は自分が思っていること、やったこと、などを聴いてもらいたいし、ほめてもらいたい、何か評価をしてもらいたいものだ。それは、子どもだけでなく大人も同じだと思う。ほめられるだけでなく、反対の立場の意見に対しては反発力となって前に進む力となるということもあるが、そういうことも人との対話の中から生まれるのではないだろうか。あきしま会議は対話の場だ。

委員 目を見ないで話すということは怖いこと。SNSなどで面と向かって話さない状況が今の社会にあるが、人間は向き合って話していないと無責任になってしまう。実際に顔を合わせて話し合う場を設ける意味はますます必要になってくると思う。

委員 対話とは、最近の若者の SNS やオンラインであり面と向かって話さないといわれたりもするが、日本にはもともと対話の文化がない。会話はしているし、討論はしているが、対話とは、対等な立場というのが大前提だ。対等な立場で A という意見と B という意見すり合わせて C をつくるのが対話だ。A と B のどちらが正しいかを討論するとか、どちらかが勝つとか、目上の人が何かを伝えるという関係性ではなく、対等な人たちが新しいものを生み出していくもののことだ。実は対話の文化というのは新しい文化で、対等な関係を生み出していくことが求められていると思う。若者だけではない。ボランティアのすそ野が広がっていかないというご意見は、今特に顕著になっており、結局そういうものを支えるのは地域のつながりであり、社会教育だ。学校を通じてというものももちろんあるが、子どもたちが小さいころから地域の中でいろいろな活動に参加していると、自然とそういうものに参加するハードルも低くなるのではないか。以前の会議で地域活動に参加している子供たちの割合の違いを見せていただいたが、参加率が高い地域は、地域活動に子供たちが参加する流れがあり、それはまさに社会教育だと思うが、それがあつて自然と学校も背中を押してくれることが必要で、地域の人たちとももともとつながっていて、「明日来てもらいたい」などと声を掛け合える関係作りも社会教育の役割としてあると思う。

委員 11 月 21 日の資料でキーワードを抜き出してあるが、青少年の居場所づくりや有用感を持たせる話から、第 4 回のあきしま会議で中学生、あるいは高校生たちの声を聞こうというなつていったと思う。参加者は大人がほとんど。第 4 回のあきしま会議を開催するにあつて、青少年の声を多く聞くことはなかなか難しいと思うが、逆に参加する大人たちが、青少年に有用感を持たせる居場所をそれぞれの団体の人たちがどう考えているのかを含めて 30 期のテーマに結び付け、あきしま会議でやった結果を踏まえてはどうか。また、今度の視察研修でも、指定管理者がどう市民のニーズを把握するかがテーマだが、送る質問の中には、青少年の関わりを聞くものもあるし、第 5 ブロックの研修会の資料の中にも、「役割をつくる」など社会教育の可能性について記されている。30 期の中ですべて結論を出さずとも、次につながる提案をするというのでもいいのではないか。

議長 また次回、テーマについて検討したい。

報 告

(1) 令和3年度関東甲信越静社会教育研究大会東京大会実行委員会第3回実行委員会(1/21) について (資料5)

議 長 令和3年度の関東甲信越静社会教育研究大会東京大会のスローガンについて話し合った。「明日に向け、学びの輪を広げよう！～地域の魅力 グローバル社会で再発見～」研究主題は設けない方向だ。4月の総会で正式に決定する。研究大会を運営するにあたり、委託業者についても選考した。令和2年度の実行委員長は青梅市、副実行委員長に府中市と昭島市が選出された。

次回

2月20日(木) 午後7時より 昭和会館

3月19日(木) 午後7時より